枕慈童　一名　菊慈童

ワキ　官人
シテ　慈童

地は　唐土
季は　九月

ワキ次第「山より山の奥までも。〳〵。道あるや時代なるらん。

詞「是は魏の文帝に仕へ奉る臣下なり。さても我君の宣旨には。酈県山の麓より薬の水涌き出でたり。其水上を見て参れとの宣旨を蒙り。唯今山路に赴き候。急ぎ候ふ程に。是は早酈県山に着きて候。是に菴の見えて候。まづ此あたりに徘徊し。事の子細をうかゞはばやと存じ候。

シテサシ「それ邯鄲の枕の夢。楽しむ事百年。慈童が枕は古への。思ひ寐なれば目もあはず。

地「夢もなし。いつ楽しみを松が根の。〳〵。嵐の床に仮寐して。枕の夢は夜もすがら。身を知る袖は乾されず。頼めにし。かひこそなけれ独寐の。枕言葉ぞ恨みなる。〳〵。

ワキ詞「不思議やな此山中は。虎狼野干のすみかなるに。是なる菴の内よりも。顕はれ出づる姿を見れば。

其様化したる人間なり。如何なる者ぞ名をなのれ。

シテ詞「人倫通はぬ所ならば。其方をこそ化生の者とは申すべけれ。是は周の穆王に召し仕はれし。慈童がなれる果ぞとよ。

ワキ「是は不思議の言事かな。誠しからず周の代は。既に数代のそのかみにて。王位も其数移り来ぬ。

シテ「不思議や我は其のまゝにて。昨日や今日と思ひし

に。次第に変はる其昔とは。さて穆王の位は如何に。

ワキ「今魏の文帝前後の間。七百年に及びたり。非想非々想は知らず。人間に於て今まで生ける者あらじ。いかさま化生の者やらんと。身の怪しめをぞ為しにける。

シテ「いや猶も其方こそ化生の者とは申すべけれ。忝なくも帝の御枕に。二句の偈を書き添へ賜はりたり。

立ち寄り枕を御覧ぜよ。

ワキ「是は不思議の事なりと。各立ち寄り読みて見れば。

シテ「枕の要文疑ひなく。

二人「具一切功徳慈眼視衆生。福寿海無量是故応頂礼。

地「此妙文を菊の葉に。置く滴りや露の身の。不老不死の薬となつて。七百歳を送りぬる。汲む人も汲まざるも。延ぶるや千年なるらん。おもしろの遊舞やな。（楽）

シテ「有難の妙文やな。

地「すなはち此文菊の葉に。〳〵。悉く顕はるさればにや。雫も芳しく滴りも匂ひ。淵ともなるや谷陰の水の。所は酈県の。山のしたゞり菊水の流れ。泉はもとより酒なれば。酌みては勧めすくひては施し。我身も飲むなり飲むなりや。月は宵の間其身も酔ひに。引かれてよろ〳〵〳〵と。たゞよひ寄りて。枕を取り上げ戴き奉り。実にも有難

き君の聖徳と。岩根の菊を。手折り伏せ手折り伏せ。敷妙の袖枕。花を莚に臥したりけり。

シテ「もとより薬の酒なれば。

地「もとより薬の酒なれば。酔ひにも侵されず其身も変はらぬ。七百歳を保ちぬるも。此御枕の故なれば。如何にも久しき千秋の帝。万歳の我君と。祈る慈童が七百歳を。我君に授け置き。所は酈県の山路の菊水。汲めやむすべや飲むとも飲むとも。

尽きせじや尽きせじと。菊かき分けて山路の仙家に。そのまゝ慈童は入りにけり。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第五輯』大和田建樹 著